【様式1】
令和６年度　授業改善推進プラン

東久留米市立中央中学校　第2学年

教科	学力に関する各調査に基づく生徒の学習状況分析 （数値等で具体的に示す）	具体的な授業改善策及び目標値 （数値等で具体的に示す）
国語	1学期に行った学期末考査では平均67.6点であった。 「思考・判断・表現」の観点での平均が５０点中、３７点であるのに対し、「知識・技能」の観点での平均が５０点中、３０点であった。	○「原因と結果」、「意見と根拠」、「具体と抽象」など、実際に話したり聞いたり書いたり読んだりする場面を単元に１回取り入れる。 ○日常的に使用する内容で文章を考えたり、伝えたりする場面を単元に１回取り入れる。
数学	東京ベーシックドリルの正答率が54.5%であり、過去の本校の正答率よりも5%ほど低い。18問の問題なので5%は1問分に換算される。各問に対する正答率を分析すると正負の数の計算や文字式の計算、1次方程式の解法の正答率は70%を超えているので基本的な計算力は身に付いていると考えられる。その反面、文章から式を立てる問いに対する正答率は42.9%と低いことから、具体的な現象に物事を置きかえることに課題があると分析する。	文章から式を立てる問題に対する正答率の50%を目指す。立式するときに単位をつけて数式が何を意味しているかを理解させながら授業を進めていく。また、生徒同士の教え合いを活発化し、生徒がアウトプットすることでより理解を深められるように授業を展開していく。
英語	○定期テストの「書くこと」に関する問題の正答率が５０%を下回る生徒が多かった。全体的にリスニング、リーディングはある程度できるが、単語のスペリングや英文を作成する際の文法上のミスが見られる。	○パターンプラクティスなどで、基本的な英文を繰り返し練習し定着を図る。また、定期的に、テーマに沿ったライティング活動の時間を設け、単語や表現を運用する力を身に付けていく。 ○授業では発話を中心にした活動を行う。単語テスト、ノートチェック、ワークシートなどを活用して生徒が落ち着いて書くことに取り組めるようにする。ノート、ワークシートの提出は頻繁に行い、普段の学習状態を把握する。
理科	実験や観察は意欲的に取り組む傾向がある。一方で定期考査では平均点が５０点、中央値４０点台で化学に対する苦手意識がある。また、前年度より計算問題や思考力を問う問題で、３割程度の生徒が空欄で近い形で解答しており、思考を伴うための知識の定着が必要であると考えられる。	記号や式に慣らすために、プリントや小テストで復習する機会を増やし、小テストで８割以上の生徒が６割以上の正答率になるように指導を行う。また単元毎に演習問題に取り組む機会を増やし、定期考査で６割以上の生徒が５割程度の点数を取れるように指導を行う。